

御神輿から学んだ 「まち」への思い

札幌オオドオリ大学
学長

猪熊 梨恵



短い札幌の夏。いつもあっという間に特に何をやるでも無く終わってしまっていたが、今年は「祭り」を感じ、ひと味違う夏を迎えている。

なぜかという、今年から「御神輿を担ぐ」ことをはじめたからだ。

きっかけは、5月に行った札幌オオドオリ大学の授業。まちの歴史と題し札幌の中心部にある三吉神社を舞台に、「神社では毎日何をしているの?」「お祭りの意味って?」と素朴な疑問を札幌のまちの歴史と共に知ることから始まった。歴史は人がつくっている、そして伝えていくことを先生である札幌四番街商店街振興組合の副理事長である坂本さん、そして、三吉神社 権禰宜の原田さんと佐藤さんの3人から多く学んだ。

札幌が開拓されて約150年。三吉神社は、秋田県から移住した人々によって明治11年に神社として建立され、「さんきちさん」と親しみを込めて今もなお呼ばれている。また、授業の翌週5月15日は三吉神社の例大祭という神様に神社の周囲に住んでいる氏子の町内を見てもらうためのお祭りが実施された。その際に神様が乗るのが、御神輿である。

授業を受けて、より三吉神社に親しみを持った私は、夏の始まりを御神輿渡御と共にスタートさせた。

例大祭では三吉神社例大祭御神輿渡御を主管する札幌四番街祭好會のみなさんから様々なことを教えていただいた。

まずは、御神輿担ぎの粋な装い。

ルーツは江戸時代の鳶職とびしよくの人たちの仕事着であった裃はんてん天、腹掛け、股引を着用する。町火消しの集団でもあった鳶の人々の中で洗練され、祭りを仕切る

役割をも担ってきた彼らから、町の人々へと伝わり、祭り衣装として定着したようだ。裃天には、神社、町会、神輿会のそれぞれ所属するところの色や柄、文字の形が染め抜きされていた。裃天が担ぎ手にとっては、御神輿に関わることを許された証であり、自らが所属する団体の誇りなのだそうだ。もちろんこの裃天を着用しない限り、御神輿には手を触れることは許されない。今回は今年の三吉神社例大祭を取り仕切る、第一祭典区「本府地区」の白い裃天を羽織らせていただいた。

裃天の中は通称どんぶりと呼ばれている腹掛け、職人が仕事をするために動きやすい股引をキュッと締め、裃天を羽織り帯を締める。

この姿になると背筋が急に伸びた。背を丸くしていちゃ背中に背負う「本府」の文字がかっこ悪い。なんだかそういう意識が変わったのだ。

さあ。次はとうとう御神輿を担ぐ時がきた。

一本締めを合図に御神輿が持ち上げられる。

街の中にある神社だけあって、鳥居をくぐって道路にでると市電の横を「オイサ」「オイサ」とかけ声をかけながら一步一步進んでいく。札幌で一番早く御神輿が出るお祭りだけあって、北海道の各地から様々な裃天を羽織っている神輿会の方たちが集合する。男性陣で担いでいるときは御神輿が上下に力強く動き、迫力あるリズムには付いていけず圧倒されてばかりだった。

そんな時、声をかけてくれたのは、祭好會副頭の松田さんだった。「自分の入りたい時に入れば良いから。大事なのは楽しんで担ぐ事。笑顔でね。」この一言で気持ちが楽になり、担ぎ手を目の前に一緒

になって「オイサ」を連呼する。その時、担ぎ手が女性陣に変わり、動きがしなやかになった。松田さんの手が伸び、私を担ぎ手の中に押し込んでくれた。

予想よりも重い。御神輿がずっしりと肩にあたる。最初はかけ声を出すことさえできず、前の人と足を合わせるのに精一杯だ。かけ声のリズムを聞き、足を揃え慣れてくると「えがお、えがおー」と周りの声が聞こえてきた。苦しいけど、笑顔を試みると苦しさが楽しさ変わってきた。「オイサ」とかけ声を出し、御神輿がどんな動きをしているのか、周りが見えてきたのだ。

その時、初めて「意気が合う」「足並みが揃う」という言葉を体験した。リズムを少しでも崩してしまうと、御神輿は重く感じるが、意気が合うと一瞬ふっと軽くなる。かけ声を出し、笑顔になり、またこの軽くなる瞬間を担ぎ手と共有したいという想いになるのだ。楽しくて仕方が無い。

自分の限界を感じ、担ぎ棒から抜け周りを見ると、沿道には多くのまちの方たちが居た。中には写真を撮っていたり、「がんばれよ〜」と声をかけてくださったり、病院からは手を振っている患者さんまで居た。また背筋が伸びた。

札幌のまちの中を約5.5km歩き、いつもとは違う視点でまちをみつめることができた。お祭り、御神輿に触れることで、やっとまちの1人として生きていることを実感したのだ。このまちの歴史を知り、そしてこの歴史を引き継いでいくこと。まちの景色はこんなにも有機的でたくさんの人に見守られていることに、感動した一日でもあった。

御神輿が無事宮入し、お祭りも片付けられた後は社務所で直会がはじまり、老若男女お祭りの成功をお祝いした。そして、私はすっかり札幌四番街祭好會へ入会したのだ。

その後、6月の北海道神宮祭、7月の四番街祭にも参加した。

参加すればするほど気づく、この街のこと。

「お祭り」の言葉の意味を知ってからは、札幌の確実なる歴史と文化を体感している。北海道神宮祭の駐輦祭は歩行者天国になっている大通四丁目交差点で行われる。北海道神宮の主祭神四柱を奉斎した4基の鳳輦や、各祭典区の山車8基、時代装束を纏った崇敬者たちなどを中心とした、総勢約1,400人に



今年の四番街祭での御神輿渡御の様子(宮澤修一氏提供)

も及ぶ神幸行列の渡御に合わせ、四番街では、札幌四番街祭好會主管のもと、「北海道神宮祭奉祝神輿渡御」が行われた。

7月の四番街祭の主管は札幌四番街祭好會がしており、札幌オオドリ大学では授業として御神輿を担がせていただいた。先生は祭好會副頭の松田さん。参加した生徒さんの中にはすっかり御神輿に興味を持った方もおり嬉しい反応だった。他の神輿会も、お手伝いで担ぐ方もこの日は共通で「街」と背中にかかれた裨天を着る。同じ想いを背負いながらの渡御はより一体感が増し笑顔が増え、渡御の後の直会も一段と盛り上がった。

御神輿を担いだ次の日に残るのは肩の痛みと大きな充実感。そして裨天を脱ぎ、背負うものが無くなったとしても、まちへの想いは変わらず、笑顔を継続したいと思う。

心持ち一つで変化するまちの景色。まちの歴史を引き継ぎながら、お祭りに参加し御神輿渡御を継続していこうと思う。今年だけでなく、これから私の夏は御神輿と共に過ぎていきそうだ。

猪熊 梨恵 Inokuma Rie

1985年、札幌生まれ。札幌市立高等専門学校 インダストリアルデザイン学科 建築デザインコースを卒業後、同校、専攻科に入学・修了。専攻科在学中にヘルパー2級を取得し、1年間休学しグループホームでヘルパーとして“介護”を体験する。卒業後、2008年春から株式会社インプロバードに所属し、ライジングサンロックフェスティバルキッズエリアのディレクションを2年間担当。他、ワークショップやトークショーのディレクションを手がける。“クリエイターと企業をつなげる”ウェブマガジン mosslink・age (モスリンクージ)を担当し、企業や札幌のクリエイターへのインタビュー情報を配信。2009年9月に退社後、札幌のまちをキャンパスに、札幌オオドリ大学 学長として奮闘中。

札幌オオドリ大学：http://odori.univnet.jp/